

最適授業メディア私論

何事もあっけらかんと議論する習慣のあるSFCでも、ひとつタブーがあるように思う。それは、われわれが授業をするに際して用いるOHP（オーバーヘッド・プロジェクター）やネットワークに接続した教壇のディスプレイなど、授業を補助する各種機器の評価についてである。

こうした新鋭機器を積極的に導入し、できる限り教育メディアをデジタル化することは、時代の流れであるだけでなく大学教育の先端を行くSFCとして当然である（デジタル・キャンパス化は先導者SFCの宿命である）、というのがここでの標準的な認識となっている。従って、それに疑いを抱くことはタブーのようにみえる。筆者も、大きな話としては、それに異存がない。ただ、そこにはいくつかの留保条件があるのではないか。

授業メディアの革新とその恩恵

SFCでの授業や会議におけるハイテク化は目覚ましい。今学期（一九九九年度春学期）からは、研究会のシラバス（授業計画書）を全て綴った冊子の作成が中止され、各研究会の内容紹介は、全てネットワーク上で学生が自由に閲覧する方式に切り替えられた。また、その他のすべての授業についても、シラバスや教材について同様の方向が指向されている。

一方、授業においても、OHPやビデオが極めて一般的に利用されているほか、コンピュータを活用した大型ディスプレイの設置に巨額の予算が投入されてきている。プレゼンテーション用ソフトウェア「パワーポイント」が、いまや万能の時代になっている。

筆者の場合も、担当授業の資料をWWW（インターネット）上で提供したり、レポートに対する一般的コメントをはじめ、基礎科目についてはその練習問題や解答を毎週WWW上に載せるなど、遅ればせながらコンピュータのネットワークを大いに活用している。学生諸君からも、幸いそれらは便利であるとの声を聞くことが多い。

授業メディアとしてコンピュータを用いる場合、確かに、その利点は一般に極めて大きい。まず、教員の側からみると（一）OHPの場合よりも教材作成が簡単であるうえ多様な資料を活用できる、（二）教材や資料の編集や改編が容易である、（三）カラフルで美しいものを提示できる、などがあるがたい。そして（四）ネットワーク接続したコンピュータを用いる場合には、従来の教室を時間的・空間的に飛躍的に拡張できる（全世界の情報へのアクセス、授業時間の制約からの解放）など、効率的な授業、そして学生にとっても従来にない興味深い授業が可能となる。ポテンシャルの大きいこうした授業技法に関し、SFCは引き続き先導役を務める必要がある。

ハイテク機器利用の落とし穴

一方、これらの新しいものを進歩と捉え、無条件に崇拝しているとすれば、その見方には一つの大きな留保条件を付けておく必要を筆者は感じている。

それは第一に、新鋭機器といえども、その利用方法が適切でなければ、伝統的な各種教育メディアに劣る面もあることだ。第二に、授業メディアとしてそれらを利用す

る場合、利用可能な領域には自ずから限界があることだ。そして第三に、最も望ましい授業メディアは、新鋭機器単独の利用というわけではなく、多分新旧の各種手法のミックスになるであろうことだ。

学会や会議でOHPや教壇ディスプレイを見せられる場合、画面が暗い、不鮮明である、画像がずれている、その結果として聞き手の注意が本論よりもそうした面へとそらされる、など初歩的な問題がよく生じている。また、必要以上に盛り沢山の情報を書き込んだ画面を見せられる（情報過多）、聴衆の考える時間を配慮しないスピードで画面が次々と繰り出される（思考スピードに対する配慮の欠如）、一見きれいだが機械によって作られるため個性が十分に感じられない（没個性）など、もう少し配慮できそうなケースもよく経験する。これらの点は、授業における場合に限らず、それ以外の場合でも使用者はいま少しセンスを磨く（少なくともセンシティブになる）必要があると思う。

教育手段としては留保すべき点も

ただ、筆者が最も重要と考えるのは、それらの機器が、授業の教材提供の面では確かに大学教育に革新性をもたらすものの、教育の根本的な意味における効用にはかなりの限界が感じられる点だ。

それは、まず、フェース・ツウ・フェース（対面）による学生との緊密なインターアクションにとって代えることはできない。また、大学教育のプロセスとはまず理解させること、そして組織的ないし創造的思考を誘発させること、と考えるならば、授業メディアとしては、新鋭装置よりも旧来の授業メディア（黒板、紙ベース資料の配布）の方が優れている面が少なくないと思う。

パワーポイントやネットワーク教材を用いた授業では、学生はどうしても受け身になりがちである。また、さして苦勞なく内容を受け取れるので、全てわかったような気になる面があるのではないか。さらに、その場での配布物が残らない（後でWWWを見ればよいという安易な気持になりがちである）点も、ものたりない。そして何よりも懸念すべきは、授業中に文字を書くという重要な過程がないがしろにされがちになるのではないか。

伝統的教育手段の方が優れる面

文字を書くことは、全神経を集中させて思考することである。この点からいうと、教師にとっては黒板に書くことが、そして学生にとっては黒板の文字や教師の話をノートに書くことが、やはり教育プロセスにおいてきわめて大きな意味を持つと思う。とすると、われわれ教員は、黒板を秩序立った使い方をする必要はある。そして文字は、例え下手な筆跡でも楷書ではっきりと、そして強く書く必要がある。走り書き的な書法は、回避すべきである。

教壇ディスプレイに写し出された無機的な文字を学生がノートに写し取ることと、黒板に人の手で書かれた暖かみのある文字を彼らが書き写すことには、大差がある。黒板に書かれる文字は、単に教員の個性を体現しているだけでなく、それが書かれるスピードが思考のスピードに合致している点で優れた教育メディアである。幸いSFCでは、黒板の整備が一日に一回でなく、毎回の授業毎にていねいに行われている。これはSFCが誇るべきことのひとつであり、そこに込められた思想を大切にしたい。

教育は画一的なコンビニの弁当（一見きれいな画面）によってではなく、やはり手作りの料理（思考を援助する栄養素ともいえる手書きの手段）によってなされなくてはならない、と私は思う。

OHPやパワーポイントは、諸刃の剣である。それらは、学会等での研究発表には適しているが、大学の授業に用いる手法としてみた場合には、最適なものかどうか議論の余地があると思う。因みに筆者の場合、学会発表等ではこれらの機器を使用するものの、授業ではハンドアウト（関連資料を凝縮して一枚に収めたもの）および板書を重視しており、これまでのところそれらの機器を用いていない。また、先般（一九九九年初めに）SFCの全教員に配布された新鋭のノートパソコンは、授業準備や研究活動の上では貴重な用具になっているが、授業にこれを使うことに対しては筆者はなお躊躇している（これらを企画運営しているネットワーク委員会には申し訳ありません）。

黒板以外でも、伝統的メディアをもっと効率的に利用する必要性、ないし改善する必要性が実は少なくないように思う。例えば、メディアセンター（図書館）における教材指定図書棚の積極的な活用だ（SFCは米国等の大学に比べてこれが極めて貧弱である）。また、配布資料に対する細かい配慮、具体的には配布日付や通し番号の記入、出典明示、用紙サイズの統一等にも教員は神経を使うべきであろう。さらには、教室のマイクロフォンの性能や様式の改善も検討課題になろう。手持ちマイクは、一方の手を塞いでしまい表現手段の一つが奪われるので、スタンド型のマイクを基本にするのがよいように思われる。

最適教育手段の構築への努力を

大学での各種授業メディアは、その特性に応じた使い分けが必要である。そしてその場合、おそらく新旧各種メディアを組合せることによって、最適なものが得られるだろう。

そのためには、われわれ教員は各種授業メディアとその性質に一層神経を配る必要がある。また、SFCではすばらしい授業手法が多くの教員によって用いられているケースが少なくないので、それを教員同士が相互に学んで取り入れるべきではないか。例えば、そのためにアゴラ（研究集会）を開催するなどしてはどうだろうか。それらの教授手法は、個々の教員によって開発されたものであるとしても、特に企業秘密というわけでもないと思う。そうすることにより、SFCの授業を全体としてより良いものにしていきたいものだ。

（慶應義塾大学SFCニュースレター「パンテオン」一 巻一号、一九九九年七月）